

令和7年度あいちラーニング推進事業研究報告書【重点校】

研究 テーマ	「主体的で対話的な深い学び」を推進する授業づくり	
本年度の 研究目標	(1) ICT機器を効果的に活用した授業の展開 (2) 授業における「協働的な学び」や「個別最適な学び」の推進 (3) 授業実践の公開及び研究協議の実施	
研 究 の 実 施 内 容		
実施月日	内 容	備 考 (対象生徒等)
令和7年 5月12日	あいちラーニング推進委員会（第1回） 概況説明及び研究の計画	推進委員
5月26日	第1回あいちラーニング推進事業連絡協議会 主管校（豊橋東高校）による研究計画の助言	担当教員
6月26日	あいちラーニング研修会（豊橋東高校）	担当教員
8月中旬	研究担当教科の教科会 研究計画について	担当教科
9月19日	あいちラーニング推進委員会（第2回） 担当教科の研究計画について	推進委員
9月30日	あいちラーニング推進委員会（第3回） 公開授業及び研究協議会の開催について	推進委員
10月9日	現職研修 ICTの活用研修	全職員
11月4日	主管校（豊橋東高校）の公開授業及び研究協議会	職員
11月11日	公開授業及び研究協議会の実施 主管校（豊橋東高校）による助言	担当教員
令和8年 3月	研究成果のホームページへの掲載 主管校（豊橋東高校）への報告	担当教員 担当教員
研究成果の評価及び普及・還元に関する実績		
1	はじめに 本校は観光ビジネスコースや福祉実践コースといった、地元の渥美半島に根付いた特色あるコースを有する高校である。また、全てのHR教室や学習室、特別教室にプロジェクターとスクリーンを配置して、ICT機器を活用しやすい環境を整えている。さらに近接している福江中学校との連携型中高一貫教育や、地域の方とのコミュニティスクールとしての活動にも注力しており、よりよい指導・よりよい授業のために多角的な取り組みを行っている。 昨年度からあいちラーニング推進事業の重点校に指定されたことを受け、「主体的で対話的な深い学び」を推進する授業づくりを研究目標として掲げた。ICT機器の効果的な活用や授業実践の公開及び研究協議の実施等を通して、授業における「協働的な学び」や「個別最適な学び」の実現を目指し、今年度は地歴公民・理科・英語・観光・福祉を主担当教科として研究を行った。	

## 2 あいちラーニング推進事業に係る公開授業及び研究協議会

### (1) 日時

令和7年11月11日(火) 第5・6限

### (2) 参加者

県内の高等学校教員：5名

田原市内の小・中学校教員：9名

### (3) 授業内容

#### <地歴公民>

実施クラス：2年1組

科目名：公共

授業内容：授業内で Teams のチャット機能や Forms のアンケート機能を用い、生徒の意見集約や学級内への共有を行う。また、生徒の学力定着のため、Forms のアンケート機能を用い、授業の振り返りを行う。振り返りを行うことで生徒の理解の様子や、定期テストにおける点数の推移を確認する。

#### <理科>

実施クラス：1年1組

科目名：科学と人間生活

授業内容：光の単元において、光の性質の理解を深めることを目的に、班別に探究する活動を行う。理解度を把握するために Forms を活用したり、調べた内容を PowerPoint でまとめたりする場面で ICT 機器を活用する。

#### <英語>

実施クラス：2年2組 文型クラス

科目名：英語コミュニケーションⅡ

授業内容：ICT 機器を活用して英語のスピーチ原稿を推敲する活動を行うことで、英語の正確さを主体的に高められるようにする。また、自分が話した英語を録音し、それを聞いて練習することで英語を発表する力を高める。

#### <観光>

実施クラス：3年1組 観光ビジネスコース

科目名：おもてなし演習

授業内容：高校生が地域産業を理解し、進路意識を高めることを目的とした「職業体験プログラム」を実施する。そして、職業体験を通して生徒が気づいたことや考えたことを、生成 AI を活用して言語化させる。

#### <福祉>

実施クラス：2年1組 福祉実践コース

科目名：生活支援技術

授業内容：介護技術の実技の授業で、教員が介助の見本を見せるだけでなく、介助を行った様子を生徒に撮影させ、振り返りのときに見せることで、生徒が介助の課題を発見しやすくさせる。

## 3 各教科の研究報告

### <地理歴史>

#### (1) 研究のテーマについて

本研究のテーマは「授業内の意見共有における ICT 機器の活用方法」である。今まで授業内で意見共有を行う場面は多くあったが、すべての意見を共有することが難しかった。また、本校生徒は人前で自分の意見を発表することに苦手意識があり、活発に意見共有が行われないという課題もあった。そこで、本研究では、Teams のチャット機能や Forms のアンケート機能を用い、生徒の意見集約や学級内への共有を行うことで、すべての生徒の意見を共有するとともに、意見を発表する敷居を下げることで活発な意見共有を促すことで、生徒は多角的な視点で課題解決に取り組むことができるのではないかと考えた。

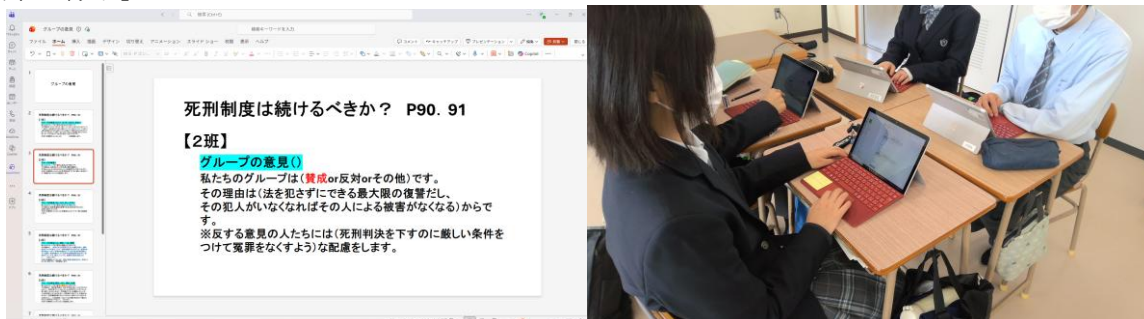
#### (2) 研究授業の所感

研究授業では Teams の同時編集機能を用い、生徒の意見をそれぞれのスライドに入力させた。これにより、班のメンバーの意見が見えるようになり、会話が活発になった。また他の班の意見を見る時間を確保することで、多くの人の意見を同時に見ることが可能になった。従来の発表に比べ、他者の意見に触れやすくなったと実感できた。

### (3) 研究のまとめと今後の課題

本研究を通して、意見共有の場面でのICT機器の利用は有効であることが分かった。生徒の意見の可視化につながり、班でのグループワークや、教員からの意見の抽出がしやすくなった。また、成果物として残るため、評価のしやすさにもつながった。一方で、生徒のタブレット端末忘れや、ネットワーク環境に大きく左右されるため、円滑に進まない時の代替案を常に準備しておく必要がある。

#### 【授業の様子】



### <理科>

#### (1) 研究のテーマについて

本研究では「探究的な活動の場面において、タブレット端末を効果的に使用する手立て」について研究した。班別での探究的な活動において、タブレット端末を活用し、学習の理解度の差を埋められるように計画した。理科が不得意な生徒も班別による探究的な活動に取り組みやすくなることを目指した。

#### (2) 研究内容と効果

科学と人間生活の「光の性質」の単元において、班別に研究テーマを定め、計画・実験・振り返りができる授業展開とした。普段の授業からすでに、生徒の理解度を把握するためにFormsのアンケート機能を活用したり、調べた内容をPowerPointでまとめたりする場面でタブレット端末を活用している。研究授業では、タブレット端末を利用して実験内容の記録画像や動画を撮影することで、今までより充実した探究的な活動を行うことができた。

#### (3) 研究のまとめと今後の課題

探究的な活動の中で、光の性質に疑問を持ち、活動しながら生じた疑問を解決しようと、意欲的に取り組む様子が見られた。また、教科書に載っているような画像を自分たちで再現し、撮影した画像を他者にわかりやすく伝えられるように、まとめ方を工夫して取り組む班もあった。班別に確認した内容をデータや画像で残すことができ、Teams上に共有することで、実験内容を全体に共有するのに有用であった。一方で、実験などの活動を振り返り、自分の考えの変容や、協同活動での成果をまとめる際に、難しさを感じている生徒も多く、タブレット端末を活用しつつも、自分自身の考えをまとめる力を育てられるような授業計画をしていきたいと感じた。

#### 【授業の様子】



### <英語>

#### (1) 研究のテーマについて

本校の生徒は、ペア活動やグループ活動で意欲的に活動する姿が見られる一方、基本的な語彙や文構造の定着が不十分で、英語で自分の考えを伝えたり、やり取りしたりすることに課題がある。特に、ALTとの会話後に自分の発話を振り返り、改善につなげる学習活動が

十分ではなかった。そこで、ICT端末や生成AIを活用して発話を可視化し、振り返りと改善を行う学習活動を通して、より伝わる英語表現を主体的に考える力を育成することを目的とし、本研究テーマを設定した。

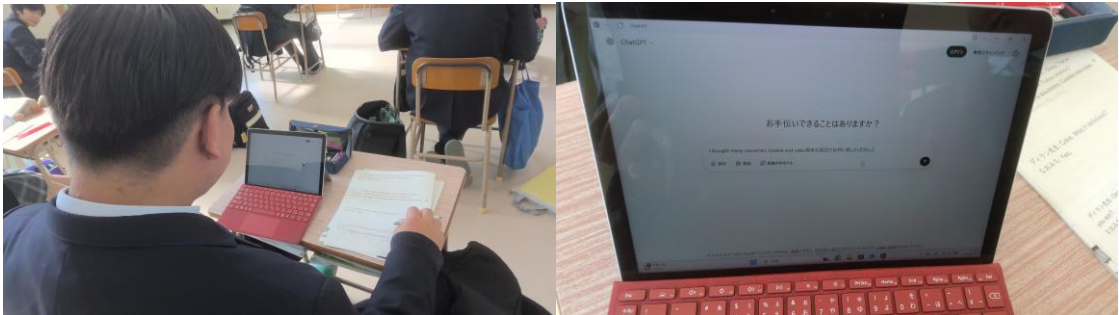
## (2) 研究内容と効果

研究内容として、修学旅行の思い出をALTに伝える一対一のインタビューテストを実施し、その会話を録音・録画した。得られた音声データをICT機器でスクリプト化し、本時の授業ではChatGPTを活用して、より自然で伝わる表現について考える活動を行った。また、Wordのディクテーション機能やTeamsを用いた音読練習を取り入れ、英語に触れる機会を増やした。その結果、生徒は自分の発話を客観的に捉え、改善点に気付こうとする姿勢を見せ、英語を使うことへの抵抗感が軽減された。

## (3) 研究のまとめと今後の課題

本研究を通して、ICT機器や生成AIを活用した振り返り活動は、生徒の英語表現への意識を高め、主体的に改善しようとする態度の育成に効果があることが分かった。一方で、基礎的な語彙や文構造が十分に身に付いていない段階では、表現の改善に限界があるという課題も明らかになった。今後は、基本的な英文の定着と英会話の経験量を確保したうえで、ICT機器の活用を段階的に取り入れる必要がある。教員自身もICT機器の活用の理解を深め、主体的で対話的な深い学びにつなげていきたい。

### 【授業の様子】



### <観光>

## (1) 研究のテーマについて

本研究のテーマは、「職業体験を通して形成された生徒の内面的な気付きや考えを、生成AIを活用して言語化する学習の在り方」である。多くの生徒は、体験を通して働くことへのイメージや感情を持っているものの、それを自分の言葉で表現することに困難さを抱えている。そこで本研究では、ChatGPTを“答えを与える存在”ではなく、“思考を整理し、言語化を支援する補助的なツール”として位置付け、ペアでの対話活動と組み合わせることで、生徒が安心して考えを表出できる学習環境を構築することを目指した。生成AIの活用の目的を明確に限定し、「考える主体は生徒自身である」という前提を重視した点に本研究の特色がある。

## (2) 研究内容と効果

研究授業では、職業体験の振り返りを題材に、①体験を単語で想起する②ペアで相談しながらChatGPTに入力する③生成された文章を基に自分の考えを確認する④ループリックで思考の段階を把握する、という流れで学習を展開した。文章作成を求めず単語入力に限定したことで、表現への心理的負担が軽減され、多くの生徒が主体的に活動に参加する姿が見られた。また、生成AIの文章を「自分たちの考えかどうか」という視点で検討することで、思考を客観的に捉え直す契機となった。結果として、生徒が「考えを言葉にする方法」を具体的に理解し、以後の振り返り学習への見通しを持つ効果が確認できた。

## (3) 研究のまとめと今後の課題

本研究を通して、生成AIを適切に位置付けることで、生徒の思考を代替するのではなく、思考の可視化や言語化を支援する有効な学習ツールとなり得ることが明らかになった。特に、ペア活動と組み合わせることで対話が促進され、自己の考えを相対化する学習効果が高まった点は大きな成果である。一方で、生成AIの生成結果を無批判に受け取ってしまう可能性や、個々の思考の深まりに差が生じる点は課題として残る。今後は、ループリックの活用をより継続的なものとし、生徒が自走的に振り返りを行える仕組みを整えるとともに、生成AIの活用に対する判断力や批判的思考を育成する指導の工夫が求められる。

## 【授業の様子】



### <福祉>

#### (1) 研究のテーマについて

本研究のテーマは、「実技の授業における動画の活用」である。実技の授業では、見本を見せた後に生徒同士で介助の実技を行っているが、相手の介助を見るだけでは自分の介助のどこに課題があるのかを客観的に理解することが困難であった。そこで、生徒自身の介助の様子を動画で撮影し、振り返りのときに動画を活用することで、自己の介助の課題発見の一助とすることを目的とした。

#### (2) 研究内容と効果

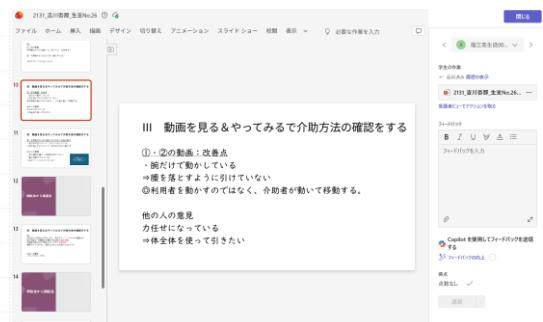
研究授業では、生徒同士で仰臥位から端座位へ体位変換をした様子を撮影し、その動画をPowerPointに貼り付け、動画を確認させながらペアやグループで介助の課題や根拠を考えさせた。介助の様子を動画撮影したことで、生徒がどの部分に着目して考えればよいかを理解させやすくなった。また、繰り返し再生することができるため、何度も動画を見返し、課題を発見しようとする姿がみられた。

#### (3) 研究のまとめと今後の課題

本研究を通し、生徒自身の撮影した動画を活用することで、自己の介助の課題を発見しようとする態度に効果があることが分かった。授業後の感想では、「何度も確認できるのでしっかり考えられた」と振り返りを記述している生徒もいた。一方、少数ではあるが、動画を撮影することやそれを共有することに抵抗を感じている生徒もいるため、生徒に配慮をしながら動画の活用をしていく必要があると考える。

## 【授業の様子】

### 側臥位から端座位①



## 4 まとめ

今年度も、「主体的対話的な深い学び」を推進する授業づくりを研究テーマとして掲げ、授業研究を担当した教員はICT機器を活用し、授業における「協働的な学び」や「個別最適な学び」の実現へ力を注いだ。さらに本研究に関する共有フォルダをTeamsの教員チーム内に作成したことで、教員同士で成果物を共有できるようにした。

昨年度と比べ、研究を担当した教員以外のICT機器の活用が増加した。またICT機器以外にも生成AIを有効に活用した授業も見られ、学校全体で「主体的対話的な深い学び」を目標とした授業が展開された。しかし、授業でのICT機器の使用は目的ではなく、よりよい授業をするための手段の一つである。その点に留意することが大切であると改めて感じた。以上を踏まえた上で、来年度以降も、ICT機器や生成AIの効果的な活用を推進しながら、さらなる「協働的な学び」や「個別最適な学び」を実現できるよう取り組んでいきたい。